高値の幕開け

慎太郎は、石渡の訪問が無事終了したので、約束通り同じレジデンスに住むイブラヒムそれに植木の三人で会合を再開した。

ポールの斬首事件の後、皆がふさぎ込んでいた時だったので集まって憂さを晴らしたいという気持ちもあった。

原油価格は、五月二四日に四一・七二ドルを付けて以来、下落を続け三七ドル台となっていた。

石油市場の安定を標榜する国際機関に勤める植木がこのような下落局面にホッとしている反面、先物取引を行っているイブラヒムは五〇ドルに向かいそうもない雰囲気に落胆していた。原油価格の動向に対する二人の態度は相変わらず対照的だった。

「アムステルダムの第九回国際石油・ガスフォーラムでは、丁度閉会時に原油価格が史上最高値を更新したこともあっ

て、消費国だけではなく産油国の閣僚も高原油価格に懸念を表明して会議後の議長声明には高エネルギー価格に対する懸念を盛り込むことが出来ました。その問題意識は適切だったと思います。しかし、その解決策として石油開発などエネルギー関係に対する投資を増大して供給能力を高めるという即効性の無いものしか提示出来なかったのは大変残念なことでした。ただ、その後、徐々に原油価格が低下して来ているのでホッとしているところです」

と、植木はアムステルダムで開催された閣僚級会合の結果を二人に紹介した。

「そうですか、産油国の閣僚も高原油価格に懸念を表明しましたか。僕は、まだまだ、産油国としては満足出来ない価格水準だったのではないかと思っているのですが・・・ＯＰＥＣは六月三日にベイルートで開催された総会で二〇〇万バレルの増産を決議しましたが、アムステルダムの時には既にそんな兆候はあったのですか」

原油価格低下に意気消沈しているイブラヒムは不満気に

植木にそう聞いた。

植木は、おもむろに口を開いた。

「ＯＰＥＣも必ずしも原油価格が高ければ高いほど良いと思っているわけではないと思います。高くなることによって、石油需要が減退するか、もしくは伸び率が低下するのは好ましいこととは思っていないでしょう。ただ、加盟国によって意見は異なります。穏健派と言われている国、特に、サウジアラビアは、そう思っているのではないでしょうか。アムステルダムでも、そんな感じでしたが、まだ、増産の話は出ていませんでした」

植木は、まず自分が思い描いているＯＰＥＣの価格政策を語りフォーラムの会場の雰囲気を伝えた。

「六月三日の増産決議には、その直前の六月一日に原油価格が四二ドルを超えたことも影響しているのでしょう。これで、七月一日からイラクを除くＯＰＥＣ加盟一〇ヵ国の生産上限は日量二五五〇万バレルになります。さらに八月一日からは二六〇〇万バレルへと増加します。ＯＰＥＣとして

は、原油価格が多少低下しても、ここまで増産出来るのですから大変ハッピーですね」、

「ただ、ＯＰＥＣは、三月の総会までは、増減産により原油価格を目標とする二二ドルから二八ドルまでの価格帯に維持しようとするプライスバンド制を維持していると言っていました。ところが、三日の今回総会では、議長が、このプライスバンド制は過去三年間にわたり上手く機能してきたし出来るだけ早く復帰したいと思っているが、復帰は困難だと評価しています」、

「また、ＯＰＥＣは、わざわざドル減価問題を検討しているとの報道を否定していますから、逆に、噂通り、ドル減価問題を検討していたのかもしれません。ご存知の通り、原油価格はドル建てですから、ドルが減価すれば、実質価格は低下することになります。ＯＰＥＣがこの問題を検討している可能性は高いでしょう。ドルが減価している現在、この問題を検討しているということはより高い価格水準を望んでいることを意味することにもなりますね」

植木は、フォーラムでの高値懸念に対するＯＰＥＣ閣僚の

同意、今回の増産決議には好感を持っていたが、高値容認とも受け取れるＯＰＥＣの動きがあることには強い懸念を持っていた。一体ＯＰＥＣの真意はどちらなのか、それは今後の原油価格の動きを決定する大問題だった。植木は、それを量りかねていた。

他方、イブラヒムはＯＰＥＣの高値容認に期待をかけていた。

「今後、一体、どうなるのか、面白い時期になりましたね。特にサウジがどのように考えているのか知りたいですね。今度、石油省に行って、高官から話を聞いてみましょう」

と慎太郎は、話を繋ぎながら、アリから、いつでも気楽に立ち寄って欲しいと言われていたので、一度、アムステルダムから帰ったアリ石油相を訪ねてみようと思っていた。

「実は、六月三〇日に、このリヤドで国際石油・ガスフォーラムの理事会が開かれるのです。アリ石油相が開会の挨拶をされますが、その時に記者会見も予定されています。何をお

っしゃるか今から楽しみにしています」

植木は、まさかそのアリのところに慎太郎が訪れるとは夢にも思わず、そう語った。

慎太郎は良いことを聞いたと思った。アリを訪問した時にその国際石油・ガスフォーラムの理事会のことも聞いてみることにした。

植木は、続けて、今回アムステルダムの国際石油・ガスフォーラムでは、国際石油需給統計の整備を進めて市場の透明性を高めるよう要請があったなどと喋っていたが、慎太郎はアリとの面会を考えて気もそぞろだった。

アリは上機嫌だった。前のように慎太郎とアラブ式に抱擁し、慎太郎の頬の手前で軽くキスをすると、慎太郎にお礼を言った。

「良く来たね。ミスター・イケナミ。滞在を延長してくれて有難う。是非、リヤドを楽しんで欲しい。前に約束した通り、いつでもアラムコの見学をセットするから、気軽に言ってくれ。そうだ、パーティーの時に同席した公使も一緒に行ったらどうかな。飛行機で行けば、日帰りも出来るよ」

改めて見学を進めるほど満足気だった。

「閣下、有難うございます。それでは、早速、林公使とスケジュール調整させてもらいます」

慎太郎はお礼を言うと、この時とばかりに、すかさず切り出した。

「ところで、閣下、もうじき、国際石油・ガスフォーラムの理事会がリヤドで開催されるようですね」

この思いも寄らぬ発言にアリは、一瞬、怪訝(けげん)な顔をしたが、頭の回転が速いアリは、直ぐに応えた。

「そうそう・・・君は、そんなことを良く知っているね。そうか。そう言えば、今度、フォーラムの事務局に日本人の局長が来たから、彼から聞いたのだね」

慎太郎は、別に隠すことでもないので正直に応えた。

「閣下、仰せの通りです」

すると、アリは、得意げにとうとうと説明を始めた。

「国際石油・ガスフォーラムにはわが国も力を入れていてね。特に、サード皇太子が第七回国際石油・ガスフォーラムが二〇〇〇年にこのリヤドで開催された時に、常設事務局の設置を提唱し、それが実現することになったので思い入れは大きい。事務局の本部をリヤドに設置することになったのもそのためだ。世界的な国際機関の本部を、リヤドに設置するのは、初めてのことだし、力も入っている」

「そうだったのですか。それで、植木さんがリヤドに来ることになったのですね」、

「ところで、その事務局の理事会の時に記者会見がセットされているようですが、閣下はそこでどのようなことをおっしゃるおつもりですか」

と慎太郎は聞いてみた。

「国際石油・ガスフォーラム関連の会議だから、フォーラムのことをしゃべりたいのだが、そうもいかないだろうと思っている。わが国の石油政策に関して質問が出るだろうね」

とアリは応えた。

慎太郎も、同感だった。ＯＰＥＣの増産決議のせいもあり、原油価格が低下し始めている時に、記者の質問は原油価格、原油需給問題に集中するのではないかと思われた。

「ミスター・イケナミはどう思うかね」

アリは慎太郎に聞いた。慎太郎は、偉い人が自分の答を持っていながら、それを確認するように周囲の人に訊ねることを良くわかっていた。また、アリは、沙漠のパーティーでの慎太郎のコメントが頭の中に残っていて何か気の利いたこ

とを言ってくれるのではないかと期待していたのだろう。
「ＯＰＥＣが二〇〇万バレルの増産を決議してから、石油市場は安定化の方向にありました。その上、イラクの政権移譲、パイプラインの修復、そしてノルウェーのストライキ終結などの弱気要因が加わって現在は、下落傾向にあると思います。このような時には、記者の人は、貴国が適正価格をどのように考えているのかについて相当の関心があるものと思います。もちろん、貴国の原油生産状況、産油能力についても多大の関心をもっているのではないでしょうか。つまり、貴国の石油価格、生産政策ですね」
と慎太郎は答えた。
アリは目を細めてウンウンと頷きながら静かに慎太郎の答を聞いていた。

いつも多忙なアリだったが、アムステルダムから帰り、フォーラムの理事会までの間の小休止を楽しんでいるようだった。そこで、慎太郎は、話を変えてみた。
「ところで、閣下、先日のパーティーで香木の香りを楽しま

せて頂きまして有難うございました。あのゆらゆらと立ち上がる煙を見ていますと、幽玄の世界に誘い込まれるような気がしました。あれは、相当に良いものなのでしょうね。日本でも、昔は、貴族、戦国武将などがその優美な甘い香りを楽しんだようですし、今でも仏教寺院では時折焚いています」

と水を向けてみた。

アリは、この慎太郎の言葉がかなり嬉しかったようで、とうとうと話し始めた。

「そうか、君は気に入ってくれたか。あれは、この間も言ったが、インドからのもので最高級品だ。この国では、主に、インド、カンボジア、ジャワから香木を輸入しているが、ランクは、インド、カンボジア、ジャワの順だ。もちろん、その中でもピンからキリまであるから、目が利かないといけないが・・・」

アリは博識だった。

「君の国では、伽羅が最高級品だが、これもこの間も言ったが、ベトナム原産で、今は輸出禁止になっているから、手に

入れることは出来ない。まあ、インドの最高級品は、それにも劣らないがね」、

「香木というのは、沈丁花科の木がたまたま不健康な状態になり、これを食い止めるために芳香のある樹脂を発生して出来たものだ。自然の偶然というか奇跡に近いもので、その成分はわかっているが合成することは不可能ということだ」、

「石油と同様、アラーからの賜物だ。そんなに、気に入ったのなら、ここにも少しあるから持って行くかね」

と言って香木の入った小さな箱を慎太郎に手渡した。

アリは、本当に香木が好きらしい。アリによれば、あの高名なヤマニ元サウジ石油相も香木を好んだらしい。

その後、街に出て、香木屋に立ち寄る機会があり、その店の最高級品の値段を聞いたところ、三〇グラムで一万リヤル(約三〇万円)ということだった。恐らく、アリの持っていたものはこの店の最高級品より高価なものだろうから随分高いものをもらったことになる。

最初貰った時はその価値がわからず、とにかく高価なものだろうと思っただけだったが、慎太郎は香木に魅了されていたので貰ったこと自体が心底嬉しかった。それは慎太郎の顔にもありありと現れていてアリも満足気だった。

それ以降、香木は、慎太郎の趣味の一つとなった。香木は相当に高価なものだったが、サウジでは酒が一切飲めないので慎太郎は酒にお金を使っているつもりで香木を購入することにした。こうして、香木を焚くのが慎太郎の格好の趣味となった。

翌三〇日の国際石油・ガスフォーラムの理事会は、サウジ石油省の全面的支援で開催された。

理事会の会場には、小泉元首相も宿泊したことのある迎賓

館が使われた。この迎賓館は大層豪華なところで、正面玄関を入ると中央の広いホールが天井までの吹き抜けになっていて、その真中には満々と水を湛(たた)えた池があった。池の中には噴水があって、勢い良く水を吹き上げていた。吹き抜けの周囲には客室用の回廊が設置されていて、賓客はここからホールを見下ろせるようになっていた。迎賓館は五階建てで回廊も五層になっていた。

周囲にはベドウィンの接待用具などが陳列されていて、壁際にも大層貴重な珍しいベドウィンが使用した器具、装身具などが陳列されていた。また、この迎賓館でも格別美味しい正統派のアラビア料理、西洋料理が用意されていたしＤＱ(外交団用地)内にあるもうひとつの迎賓館でも美味しいアラビア料理、多国籍料理が用意されていた。

理事会に出席した植木には、これらのことからも国際石油・ガスフォーラム理事会の重要性、サウジの力の入れようが良くわかった。

理事会に先立つアリ石油相の記者会見では、案の上、サウ

ジの石油政策に関する質問が集中した。アリは、記者の質問に対し、淡々とサウジの石油価格、生産政策を説明した。

アリは、現在の価格が適正であること、価格維持のためには増産もするし減産もすること、現在、サウジには一五〇万バレルの余剰能力があることなどを表明した。

このニュースは瞬く間に世界を駆け巡りアリの意図するところではなかったが格好の値上げ材料となり原油価格を引き上げることになってしまった。

そして、それが誰も予想し得なかった、以降の価格上昇のきっかけになった。

まず、現在の価格が適正とのアリの意志表示、減産の可能性についての発言が強気要因となった。そして、最後の一五〇万バレルの余剰能力についての発言が市場に決定的な影響を与えたのだ。

アリ石油相は、サウジの余剰生産能力がその生産能力の一割以上に当たる一五〇万バレルもあると言ったつもりだったが、記者達は、逆にそれしか余剰能力が無いものと受け止

めた。この差は大きかった。

記者達は、基本的に非ＯＰＥＣ産油国がいつも生産能力一杯で生産する傾向があることから余剰生産能力を有するのはＯＰＥＣ特にサウジしかないと考えていたから、世界の石油供給量約八〇〇〇万バレルと対比してその数値は小さいと考えたのだった。

この影響は大きかった。六月二九日に三五・六六ドルまで低下していた原油価格は、この発言を受け、三〇日には三七・〇五ドル、七月一日には三八・七四ドルに上昇した。

植木は、言わばこのような記者団の誤解が原油価格を引き上げるきっかけになってしまったのは世界経済にとって嘆かわしいことだと考えていた。

サウジ政府は硬軟織り交ぜたテロ対策を実施していた。

六月二四日には、サウド国王がテロリストに対し一ヵ月間

の猶予付きで自首を呼びかけた。この呼び掛けは慎太郎には理解し難いものだった。アラーの慈悲による呼びかけで、テロリストに最後のチャンスを与えたものとの説明があったが、そもそもテロリストに自首を呼びかけるという行為自体が理解出来なかった。

ところが、驚いたことに、この呼び掛けに応えて六月末にはテロリストが二人自首した。この内の一人は最重要指名手配リストに入っていたものだった。結局、この期限内の七月二四日までに海外に逃亡していたもの三人を含め計六人のテロリストが自首した。

他方、従来通りの、サウジの懸命な捜索により、テロリストは次々に逮捕されたり、殺害されたりした。六月末もリヤド東部で治安部隊がテロリストの隠れ家を急襲し、銃撃戦の末、最重要指名手配者リストに載っていた二人のテロリストを射殺した。隠れ家からは多数の武器弾薬、爆発物が押収された。この隠れ家には治療施設の完備した部屋まであり負傷したテロリストに応急手当が出来るようになっていた。

また、サウジ政府は、六月末、一般市民に対し二ヵ月以内に非合法で所持している武器を差し出すよう要求した。これに従わないものは罰せられた。なお、サウジ政府は、二〇〇二年以降は武器所有許可証は発行していないとのことだったから、この刀狩政策はテロリストの武力攻撃抑制にはかなりの効果があるものと見られていた。

リヤドは、五月から九月まで平均気温が三〇度を超え、平均湿度は一〇％を下回る。特に、六月から八月までは平均気温が三五度を超え最低気温も二〇度を下回ることはない。

これは気象庁発表だから、アスファルトの通りの上などではこれを上回っていることは確実で文字通り灼熱の国だ。

ただ、湿度が殆ど無いから、熱さに強い慎太郎は、それほど熱さを感じているわけではなかった。慎太郎の部屋には乾燥機付きの全自動洗濯機がついていたが、このような季節には乾燥機を使う必要は全くなかった。洗濯物は、ちょっとその辺に置いておくだけで面白いほど良く乾いた。いつも慎太郎は、そのふっくらとした心地良い感触を楽しんでいた。